中国の“文化革命”後における魯迅作品の運命

ア・エヌ・ヂェラホヴツェフ
川上久寿訳

20世紀の中国作家のうち魯迅（1881-1936）は最上の栄誉と名声を獲得した。魯迅と同じ世代のほとんどすべての作家とまたその弟子は“文化革命”の国の社会生活から抹消されたように見える。ただひとり魯迅だけが例外で，現在の北京の新聞・雑誌では尊敬をもって語られている。がその理由は複雑かつ多様である。現代中国文学にたいする魯迅の功績は大きく，中国文学にかんする学問でもかれの貢献は大きい。かれの書いたものは画期的である。魯迅はその作品であらゆる国の読者に中国の民族性をしめし，変転する革命時代の中国社会の精神的相貌を非の打ちどころもない真実さをもって描きだした。

中国では何回も魯迅全集が出版され，最近では10巻本が1956年から1958年にかけて出版になった。魯迅の作品は解放後の中国では第一級の書物に数えられる。魯迅の書いたもののうち一部か或いはかれの名前を聞いたことのないほど文盲な中国人はおそらくいまい。毛沢東の文章のなかには魯迅の死後に書いたもので積極的に魯迅について発言したものがある。「魯迅は中国の文化革命の主将であった。かれは偉大な文学者であったばかりでなく，偉大な思想家，革命家であった」[3. 471]。魯迅の名が国の内外に知られていること，人民に人気のあること，“誤ることなき”毛沢東の好意ある批評のあること，そのすべてが毛主義者（マオイスト）たちにその利益のため魯迅の名を否定せずかえって利用させた。その確認をわれわれは毛沢東集団（グループ）がそれをもって“文化革命”（文化大革命といっていない—川上）を開始した計画文献の

中に見出す。1966年4月18日付『解放軍報』の進歩的論文はあらゆる先進的・進歩的な芸術を否定したが，魯迅については賛成してこう書いた。「30年代には実際よいものがあった。それは魯迅を先頭とする戦闘的な左翼の文学・芸術であった。しかし30年代の終りになると左翼運動の指導者のなかには，右傾投降主義路線の王明の影響のもとにマルクス・レーニン主義の階級的観点からはずれて“国防文学”のスローガンを提唱するものがあらわれた。それはブルジョアのスローガンであった。それにたいして“民族革命戦争の大衆文学”というプロレタリヤのスローガンは魯迅が提起したものである。左翼文学・芸術工作者の一部，とりわけ魯迅は文学・芸術は労働者農民につかえねばならないこと，労働者農民が文学作品の創作に従わねばならないというスローガンを提唱したが，労働者農民兵士と文学・芸術との結合にかんする根本問題には全面的解決をあたえなかった」[5. 19-20]。

中国の全作家のうちで魯迅ただひとりが“好し”とされているが，実際にはかれがそれをしたのではない。たとえば，周知のことであるが“民解革命戦争の大衆文学”というプロレタリヤのスローガンは魯迅が提唱したのではなく胡風が提唱したものである。胡風が1955年に抹殺されたので，その功績が魯迅のものに数えられたのである。“結合”の問題はこの問題にたいする毛沢東の優位をそこなわないために終局的に完成していないものとされた。これらすべての屁理屈は歴史の事実を恣に改竄してしまった例である。それとともにかれらは“文化革命”の過程で更に魯迅の作品にたいする扱い方を決定した。筆者の意味するところでは，先進的な記録にもとずいた文学・芸術工作者の協議会をこの会の以前の指導者江青が激励したことは疑いない。

1966年3月に毛主義者たちによって示唆され“文化革命”の大衆運動がはじまった。それによって，中国人民は文化的に価値あるものに近づくことができなくされてしまった。毛主義者たちがかくも熱心にまた徒らに理解した魯迅の書物，その名前も例外ではなかった。魯迅の文集は書店や図書館の読者用準備図書からは消え失せた。“文化革命”までに出版されたほとん

どすべての文学は禁止になった。文学組織の解散，文化活動家の迫害，文学作品と文学の期刊誌刊行の停止は毛主義者の“文化革命”に文化的虚無主義と文化破壊主義の名声を得させた。こういう情況のもとで1966年秋に“文化革命”の活動家たちは魯迅逝去30周年を記念した。この記念行事は中国で行われていたことの潔白を証明し，参加者たちに尊敬をはらうことを訴えようとしたものであった。

毛主義者たちはもしかれらが特別の措置をとらなかったならば，記念祭にも当然あるべきはずの反響がなかったであろうと弁明した。かれらはいまでは故人となった魯迅の未亡人を引き入れてそれに参加させた。この婦人活動家の名前は容易く信じたがらない人々を説得するに充分で，“文化革命”の側にある中国知識人の花であっただろう。そこでかの女を支援したのである。魯迅の名は文化破壊と虚無主義の非難にたいする避雷針にならねばならない。それに毛沢東政治路線に反対する現存の文化活動家をひどく排斥することもできる。

1966年に魯迅の作品が毛主義者によって用いられなかったことは特徴的である。その作品からとられたものは，作者の全体としての立場についてはふれない摘録，部分的な引用にすぎない。公式の発言者はその説得性をつよめるために細々したことで大袈裟に飾りたてた『解放軍報』の4月の社説の見地をくりかえすことを神聖な義務とみなした。

1966年9月20日『人民日報』に『周揚の魯迅誹謗と中傷を許さず』という論文がのった。その筆者許広平は“魯迅をまもる”という姿勢で“文化革命”の文化破壊主義をもち出す政府側意向の代弁者，つまり現世紀の中国文化のよき代表者としてあらわれた。そういう傾向のほかに，この論文には許広平の作風態度を八九分どおり指導した周揚にたいするかの女の個人的憎しみがあからさまに現われている。1927年に魯迅は『革命文学』という評論で次のように明確な規定をしている。「不当にも革命的とよばれる文学者のふたつの型，そのひとつは権力の庇護のもとに，自分の個人的な敵を極力罵倒するもので，もうひとつは“打て”，“殺せ”，或いは”血だ”な

どの言葉で紙を汚す文学者である」[1] [11 (3), 407]。許広平は明かに第一の型の文学者とおなじである。魯迅の未亡人としてかの女は実際には亡き夫の毛沢東への尊崇がなかったことを証明した。1966年9月許広平は文化工作に関係する大学や官庁の“革命的”な会合に積極的に参加した。この発言にかんするビラや公告は紅衛兵により広められた。そして私は直接に北京師範大学でそれらと出合わさねばならなかった。許広平は“文化革命”に参加することで中国の文学者知識人への大衆的非難に手を借した。

許広平の論文は言葉からも調子からも紅衛兵宣伝の精神で貫かれている。それは決り文句とその時勢に応ずる標準的なモデルとなる言葉にみちている。たとえば自分の主な敵周揚をかの女は「毛沢東思想に反対する反党，反社会主義の黒い路線の頭目であり，赤旗をかかげて赤旗に反対する陰謀家」と呼ぶ。これはすべて紅衛兵のひとくさりのスローガンで意味は少しもなく，許広平じしんの創作では決してない。

『解放軍報』の4月論文の主旨を許広平は完全に利用している。かの女は30年代の中国共産党側からの政治指導が正しくて革命的だったことを否定する。それから1957年の事件に移り，当時中華人民共和国で行われていた“右派分子”との戦いで公けにされたもののなかから新らしくてとりわけ隠蔽されていたことに照明をあてる。たとえば，1957年の6月から8月にかけて，中国作家協会の党組織の公開会議で周揚が魯迅攻撃を組織したという報道が中国の新聞にはじめてあらわれた。それは表面的には“右派分子”と宣告を下された丁玲，陳企霞，馮雪峰の批判のようにみえた。8月14日の第17回会議では夏衍が30年代の事にふれて馮雪峰に反対する報告をした。許広平は書く。

「この魯迅攻撃の会議が周揚によってしくまれたことは現在では明らかになっている。8月11日の午後4時，周揚，林默涵，邵荃麟その他のものが前もって馮雪峰と語りあった。周揚はその話のなかで30年代の文学論争の歴史の問題にふれたが，それは周揚の自己弁明のはじめであった。総司令

(1) ヴェ・イ・セマノーフ訳.

周揚の呼び声で陳荒煤，周立波は即刻立ち上った…」[7]。

ここに侮蔑の調子で名前をあげられたひとびとは長いこと中国文壇の花として活躍した活動家である。周揚と林默涵は指導的な評論で登場し，夏衍は演劇，映画の方面で主に活躍し，劇作家，台本作者であり，中華人民共和国文化省の次席であった。陳荒煤は映画批評家であり，映画工作者協会の指導者のひとりであった。周立波は有名な作家でロシヤ語にも訳された『暴風驟雨』の作者である。

論文の筆者はさらにつづける。「8月14日の夏衍発言は“爆破”事件だったといわれる。それは全く正しい。これは周揚一味がひそかに計画して実行した反動的“爆破”事件であった。かれらは魯迅の革命的，戦闘的な旗を爆破し，かれらの企らんだ資本主義復活の道をひらこうとした。夏衍はその発言のなかで“被害者”を装って魯迅を“告訴”した。1936年に馮雪峰が瓦窯堡（当時毛沢東を長とする中国共産党中央委員会のあった延安の附近――ヂェラホヴツェフ）から上海へもどってから“まっ先に魯迅を訪ね”，周揚その他の党の同志の意見をきかず，胡風の意見を受け入れて“民族革命戦争の大衆文学”のスローガンを提出し，恣に“左翼文化運動を分裂させる犯罪活動を行った”。

1955年に毛沢東思想に反すると非難された夏衍による胡風からの引用を論文の筆者は“悪企みの流言”と説明する。

周揚に反対する1936年に発表された魯迅の論文『徐懋庸に答え，また抗日統一戦線問題にかんして』は当時重病だった魯迅の名を利用して馮雪峰が書いたものとする周揚の確言を許広平は“もうひとつの中傷”と呼ぶ。許広平は夏衍，周揚などに反対する言葉や叫びを惜しまないが，この論題をきわめて奇怪にもひっくりかえす。「当時魯迅は重病から恢復していた（原文は大病之后―川上）とはいえ，『徐懋庸に答えまた抗日統一戦線にかんして』の公表については周揚たちとの大論争の関係上きわめて慎重だった。論文の思想内容のすべてがかれのものだったばかりか，本文もかれは綿密に改めたし，周揚ら投降者の犯罪的様相をあばいたまるまる4頁もかれ自身が

病にもかかわらず（原文は扶病—川上）書いたものである」（傍点はヂェラホヴツェフ）

こういう反駁の後に全集に示されているのと同じく原稿はほんとうに馮雪峰のものであることが正しく結論される。ただ魯迅は本文を訂正しただけである［11 (6), 614］。

ここには許広平の個人的な依怙ひいきが語られている。かの女は周揚への弁駁と反論をもって会議に出席した。しかし3ヵ月つづいた党会議が終った後に公表された資料集にかの女の発言はなかった。現在許広平は自己の権威をもって，30年代に毛主義の精神で進歩的文学者を批判していた活動家，毛沢東の指示に最も従順な魯迅だったことを証明する。それについてはかの女がこの論文に書いている。

「私ははっきりと覚えている。1936年の夏，魯迅は抗日統一戦線結成にかんする毛主席の立場を知って大いに喜び，毛主席の偉大な指示を完全に受け入れた。中国がこのように偉大な領袖をもったなら，もはや克服できない困難はない，とかれは感じた。正にこの情況のもとでかれは周揚たちの投降スローガン“国防文学”に反対する正しいスローガン“民族革命戦争の大衆文学”を提出したのである。魯迅は党中央委員会と毛主席の定めたプロレタリヤの抗日民族戦線の革命的な方向を断固として支持した。抗日統一戦線の党の政策をほんとうに裏切ったのは周揚，夏衍らを代表とする階級投降路線であった…」［7］。

こうして闘争と論戦の論理は共産党の作家を対立させ，困難な地下闘争を行っていた上海の共産党員を糾弾させる仕儀になった。魯迅の作品中にはない毛沢東の讃美は政治的な処置たることを暴いている。

1957年に党会議の総括演説で周揚は馮雪峰の分派活動を批難した。現在では許広平はかれら全部が同類だといっている。「舞台ではかれらは熱心に戦い摑みあう。しかし舞台裏ではみんな一家の人であって，誰しもブルジョア修正主義の一員であり文学芸術における毛主席の路線に反対している」。小さな具体的例がそのただひとつの証拠になる。馮雪峰が仕事をしていた

『人民文学出版社』で魯迅全集を出すとき，周揚に反対の評論を発表することが何回となく話柄にのぼったが，周揚は評論の注釈をつくり一応眼を通すよう馮雪峰に送ったのである。正にこの事実がかれらは“一家の人”である証拠となす許広平のために役立つわけである。

周揚の行動の動機は容易く理解できる。1957年に馮雪峰を“右派分子”として批判はしたものの，かれは当時の事件のただひとりの生き証人なわけだから，かれを頼りにしたわけである。しかしいま許広平はこのジェスチャーを別に解釈する。「周揚と馮雪峰は同じ穴のむじなであって，周揚が馮雪峰を罵ったのは魯迅に打撃をあたえるためである。評論には文通，つまり邵荃麟の王士菁へ林默涵の王任叔への手紙が収められている。それはわれわれが見るように「人民文学出版社」の所有文書である。この手紙の信憑性を疑うことはむずかしい。この手紙から明かなことは，これらの活動家たちがかれらの注釈にとって好都合な魯迅の文章を出版しただけでなく，かれらと周揚に反対するような魯迅の手紙は削除した。これが1957年から1959年へかけての政治闘争の現実であった。

映画「魯迅の生涯」（魯迅伝）の台本にかんする1961年の周揚の発言についての報道はおもしろい。周揚はその話のなかで魯迅を作家とよんだが，社会・政治活動家とはよばず，独得な人物として描くよう訴えた。「これが書かれた後，党の影響が充分に反映されていない。毛主席については何もふれていないなどという批評があっても恐れる心要はない」。この周揚発言は以前は公表されないでいた。許広平はこれらの言葉を“中傷”となし，周揚が「毛主席の魯迅評価に直接反対するもの」と言う。かの女は毛沢東の書いたもののなかから魯迅にふれたものは全部引用する。しかしかの女の願いにもかかわらず，指導者の名前をあげたものを取り出そうとしても，そのために好都合なものは魯迅の作品に見出せなかった。したがって自分のほめすぎの言葉にとどまらざるをえなかった。「魯迅は生存中に偉大な指導者毛主席に会うことはできなかったが，かれは燃えるような情熱をもって毛主席の天才的指導を支持し，心底から喜んで受け入れたのである…魯迅は『トロツ

キストの手紙への答』で反革命的なトロツキストの理論をきっぱりと拒絶した。手紙では限りない尊敬と熱意の革命感情をもって偉大な指導者毛主席にふれている。魯迅は書いている，「実際にたたかい，しっかと大地に足をつけている人びとが中国人の生存のためたたかい血を流しているとすれば，その人びとは同志とよぶに値するし，それを光栄と思うだろう」。

30年代にそれぞれに異った困難な状況のもとでたたかい，そしてほんとうに英雄の軍隊となった中国紅軍と中国革命にたいし魯迅が深甚なそして真摯な感情をいだいていたことには寸毫の疑いもない。しかし魯迅は上にあげた文ではただ革命家全体について語っているのであって，決して毛沢東ひとりについていっているのではない。許広平の言葉はこのばあい偉大な指導者毛主席に“触れている”ようにみえる。これは人間毛沢東にたいする媚態と偶像化という芬囲気から生れた偽造と事実の歪曲である。大作家にとって個人崇拝は絶対に縁がない。魯迅の生存中には毛沢東への個人崇拝はまだ形成されていなかった。許広平は確言するけれどもそれは証拠を欠くがために未解決の問題としてのこる。周知のように，魯迅の言葉はかれが中国のソビエト地区に共感をもち，中国紅軍を称賛していたことを明確に何の曖昧さもなしに示している。しかしかれの書いたもののどこにも“文化革命”後の中国における出版物や評論にはつきものとなった“個人的忠誠”の表現らしいものは何もない。

魯迅の文章中で毛沢東の名前が見えるのはひとつの党書だけで，そこで魯迅は“毛沢東先生”と名前だけを3回よんでいる。魯迅は『トロツキストの手紙への答』にいう，「あなたがたの“理論”は毛沢東先生のものをはるかに超えている。たしかに遙かに，ひとつは天にありひとつは地にある。しかし超えることはふつう尊敬に値するとはいえ，それが正に日本の侵略者の喜ぶものに外ならないから，あなたがたは天上から地面へころげ落ちないわけにはゆかない。地上でいちばん汚いところへころげ落ちないわけにはゆかないのである」[2 (6), 473]。

毛沢東にたいする魯迅の“熱愛”を証拠だてようとするあらゆる願望

にもかかわらず，現在の中国新聞はかくも神聖を冒瀆するものをおのが新聞にのせることに長いこと決心がつかなかった。それゆえこの唯一の直接の記述は慎重に取り扱われているが，この人の論文では望ましいことが証明されていないのにそれが証拠として引かれている。

許広平が明瞭に示していることは，政治上の反対派を攻撃するために毛主義者によって魯迅の名が利用されたこと，魯迅がかれらに興味を感じさせたのは，ただかれの名前により党内における反毛沢東派の威信を失墜させることができたためだった。

「周揚一派は30年代の文芸戦線におけるふたつの路線のたたかいの歴史を偽造したが，結局それは魯迅を撃破するだけにとどまらず，ずっと重要なことは偉大な不敗の毛沢東思想に反対するたたかいであり，王明の機会主義路線を賞讃し，資本主義復活の世論を準備することだった…。

周揚たちが文学・芸術の領域で奪いとった指導的地位を利用したのは，一貫して毛沢東思想に反対する反党の犯罪活動を行うためだった。“外国のものの前に頭を下げること”はあまり称讃しないよう毛主席が提議したとき，かれらは反対に極力称讃した。毛主席が“文学芸術の労働者，農民，兵士，大衆への奉仕”の方向を提起したとき，かれらは反対に“労働者，農民，兵士，大衆への奉仕”に反対し百方手をつくして“全人類の文学と芸術”を育てあげようとした…。

現在ではかれらの反党，反人民の陰謀は完全に明るみに出されている。われわれは声を大にして叫ぼう，プロレタリヤ文化大革命の勝利万才！　偉大な毛沢東思想万才！」［7］。

ここでもまた，魯迅の名は政治的に他を失脚させるための道具でしかない。このばあい魯迅の作品は慎重にあつかわれ，筆者はそれを引用せず，それを利用しない。許広平は敵対者が毛沢東とはちがった魯迅評価をしたという論証だけにとどまる。かの女にはそれだけで充分なのである。許広平は亡夫の生活と活動を少なからず知っていただけになおさらその沈黙は不思議である。かの女はその存命中に魯迅の追憶記を出版した。

魯迅の作品は原則的に毛主義とは一致しないし，またかれの作品が毛主義者のため政治目的に使われていることが容易ならぬ問題であることは疑いもない。また反ソ運動のためにも中国の“文化革命”の活動家魯迅の名を頼りにしている。魯迅生誕85周年記念行事は中国では特に問題にされなかったが，ソ連では行われた。1966年10月31日，10月革命記念日の前夜に中華人民共和国では魯迅逝去30周年の盛大な集会が行われた。それには許広平，北京地質学院学生で紅衛兵代表の黄平穏，郭沫若，それに中国の指導者たちが出席した。

われわれの検討した9月論文に許広平は気を好くしていた。かの女は極端に毛沢東を讃美し，亡夫に対して書き足したことは毛への“限りない尊敬と愛情”であった。かの女は更に以前の中国共産党中央委員会宣伝部長代理周揚をば魯迅を迫害した“反革命の修正主義者”とよんだ。さらに許広平は魯迅が“ブルジョア民主主義者”チェルヌイシェーフスキイになぞらえられたことに憤慨して雑誌『ソビエト婦人』の論文を批判したものである。かの女は言う「ソビエト修正主義の旦那方は偉大な共産主義の戦士魯迅を曲解すべくこれ努めている。かれらは黒を白と言い，かれをブルジョアヒューマニストとして描き，魯迅の思想があたかも反戦傾向のヒューマニスチックな性質をおびていると断言する」[8]。

紅衛兵代表の黄平穏は魯迅の作品に精通しているとは決していわなかったが，その代りに魯迅について語った毛沢東の文章と毛沢東が魯迅から引用したものはすべて用いた。それゆえ魯迅の文章から選び出した個所はもともと毛の文章である。かようにして自分からあらゆる責任を解除しては，個人的忠誠を示すという特別な才能がそこにあることは明らかである。

郭沫若はその演説で，かれが“現代修正主義”の同類とみなした周揚路線との不屈のたたかいとして魯迅の生涯を描く。かれは魯迅を「毛主席の革命理論の実践家」とよび，毛沢東の文章をとめどなく引用する。『トロツキストの手紙への答』で魯迅は中国紅軍の英雄的気概にたいして尊敬の念をあらわした。郭沫若はこれを“入党受入れの声明”（入党申請書）とみな

す。そして魯迅の死後，かれについて讃嘆の言葉で批評している毛沢東の言葉はこの声明の承認であるとみなしている。郭沫若は魯迅を歪曲し「反毛沢東思想のヒステリックな反中国，反共，反人民キャンペーンの目的に利用するため 魯迅生誕 85 周年を 行った「ソ連の現代修正主義者」を罵倒して喰ってかかったのである。かれはその演説の最後を次の言葉でむすぶ。万国の人民の“野獣と害虫”は「世界からきれいに放り投げ出されるだろう」。

反ソ目的のために悪意をもって魯迅の名を利用することは，かれの生涯と作品の全精神にそむくものである。

周知のとおり魯迅はロシヤ・ソビエトの文学作品を翻訳しており，中国や帝国主義の 敵からソ連をまもるために 憚ることなしに 沢山の評論を書いた。魯迅は書いている，「われわれ中国人には弱点がある，他人の長所にかんする話はあまり好まないことである。しかもこの憎悪は党内粛清後に尖鋭化する（魯迅は国民党を 示唆している—ヂェラホヴツェフ）。欺瞞的宣伝をしているとかロシヤのルーブルを受け取ったと疑われるためにはソ連についてやソ連の建設について言及しさえすればよい。現代中国では最高命令或いは政府の認可があれば書いた物は何の支障もなく流布される。しかしその読者は全く少ない。なぜなら宣伝はそれが即座に或いは後日に事実とし確認されたばあいにのみ宣伝になる。事実は中国に行われている宣伝の虚偽を物語っている」[2 (2), 80]。

1932 年『われわれはもう騙されない』で魯迅は直截にいう。「帝国主義の奴隷たちが闘いたければ自ら戦いにゆかせればよい！　おのが主人たちといっしょに。われわれ人民の利害とかれらの利害とは全く相反している。われわれはソ連への攻撃に反対する。われわれはソ連を攻撃する勢力を消失させねばならない。かれらがどんなに蜜のように甘い言葉を使い，公正の仮面をかぶっていようとも」[2 (2), 85]。

魯迅は後に 毛主義者の“文化革命”の基礎をきずいた 文学上の下劣な行為に我慢できなかった。1932 年にかれは 教条主義者によって“進歩的文学”に入れられた作品を批判した。「現在では極めてしばしば特に必要もな

いのに敵対者にたいして罵言を使用している。それはまるで罵言がプロレタリヤ作品のしるしであるかのようである。罵言が多ければ多いほどプロレタリヤ文学であるかのように心得ている。プロレタリヤのうちごく小数だけが到る処で罵倒している。上海の無頼漢の習僻をかれらのものにしてはならない。将来の階級なき社会において誰かの妥当を欠いだ言葉のために祖宗3代にわたる騒ぎをおこしてはいけない。[2 (2), 92]。

それゆえ，紅衛兵の文体と方法は魯迅のそれとは絶対に一致しない。疑いもなく激しく毛主義を否定する魯迅のヒューマニズもそうである。「プロレタリヤ革命は刹戮のためにではなく，個人の解放と全階級の消滅のためになされる」と魯迅は書いた [2 (2), 93]。魯迅は断固として俗流エセ左翼に反対した。「中国ではしばしば歴史唯物論の立場にあると称して，エゴイズム，個人主義，個性を一挙にひっくりかえそうとする。人がもしこういう若者にしたがって歴史唯物論を考えるとすれば，それはしごくいけないことだ」[2] [11 (4), 100]。

上のようなことを書くひとが“毛沢東思想”の靴に足をきって合わせるはずがない。最近まで毛主義者は魯迅の原典に頼っていた。それからひとつひとつ文句を捜し出せるからだったろう。魯迅の作品は事実上禁止の状態にある。もっともこういうことは慎重を期して公然と宣言されることは決してない。大作家の名を独占し魯迅の真正の顔を隠蔽する毛主義者の行為の根拠のなさはわれわれの学問的な文献，ヴェ・イ・セマノーフの論文であらわにされた。[4, 64-73]。筆者は魯迅が同時代者たちよりはずっと広く革命を理解していたことを証明した。かれはロシヤ・ソビエト文学を中国に積極的に広めたし，30年代にはマルクス・レーニン主義美学の大宣伝家であった。魯迅は教条主義者と苦しい戦いをしたが，それはかれ成熟期の芸術活動を滅殺させたであろう。魯迅は左翼偏向とのたたかいでエンゲルスの手紙，レーニン，ゴーリキイ，ボリシェヴイキ中央委員会の文献を引用した。かれは当時すでに“革命”作家にあるナショナリズムの現れをあばいていた。

---

(2) ヴェ・イ・セマノーフ訳.

魯迅の権威をぜひとも利用しようとして，毛主義者たちは何にもまして1942年の延安における文学・芸術にかんする会議で毛沢東自身が引用した魯迅の文章を利用する。「眉をしかめ冷たい蔑みをこめてお偉がたの本性をあばき，頭を俯け牛のように子供に仕えよう」[3 (III), 120]。毛沢東はこの引用を次のように解釈する。「お偉方という言葉はここでは敵と解される。われわれは決して敵に頭を下げない。たとえそれがどんなに兇暴であろうとも。“子供”という言葉はプロレタリヤと広汎な人民と解される。共産党の全党員，すべての革命家，革命的文学・芸術の工作者は魯迅に見ならわねばならない。プロレタリアートと人民大衆の“牛”とならねばならない，最期の時までおのが全力，全生命をそれがために投げ出さねばならない」[3 (III), 120]。

毛沢東は“文化革命”のずっと前に魯迅の言葉をこのように解説した。ここで用いられている“プロレタリアート”と“人民大衆”の概念それ自体が“文化革命”の進展とともに，自分自身を“毛沢東の忠実な牛”とファナティクによぶ毛沢東路線の支持者を専ら意味するようになったのである。したがって魯迅が正しく理解した人民への忠誠は事実上は盲目的な個人的忠誠へと変ってしまった。意味の変更は完成されたのである。

毛主義者はこの個々の表現にしたがい，魯迅の全作品の意味も変更すべく決意した。こういう試みは1967年に実行された。『人民日報』7月17日付は魯迅の評論「フェアプレイはまだ早い」をいきなり掲載した［9］。この評論は1925年12月29日つまり中国で革命運動が激しく昂まった時に書かれたものである。英国風の中国作家で自由主義者の林語堂が英語の表現で“フェア・プレイ”を提唱した。かれは「水に落ちた犬は打つな」，一時的敗北を喫した反動をそのままにしておいて構うなと訴えた。林語堂の妥協政策と自由主義に反対した魯迅の評論にはそれが方向づけた対象と理由が明かに示されている。だからこそ魯迅は「水に落ちた犬を打て」と要求したのである。「私はあえて断言する，反革命家たちの残酷は手加減されたことはなかったし，反動の手段の非人間性もはやこれ以上にはならない。ただ改革者

自体はいまだに夢を見ており失敗を喫している，それゆえ中国ではいまだに改革がなされない。これからはこういう戦いのしかたを終らせねばならない[2 (2)，35]。

魯迅はその評論で，暗黒勢力が中国を支配していたとき階級の敵，帝国主義，および反動に対する中国人民の革命闘争を支援した，そしてその時は革命の勝利の時から24年も隔っていた。解放後18年を経て毛主義者はどうしてこの評論が必要になったのか。編者のことばは語る，毛沢東集団は魯迅の評論をば宛名を書きかえて送り，党の決定に忠実で，毛主義路線にたいして反対する中国共産党員に反対するようそれを差し出そうとした。「党内の権力によって暴露された一団，および資本主義の道を歩む一団は人に咬みつく犬であるばかりでなく，人喰いの野獣である。プロレタリヤ文化大革命がかれらを引きずり出し，かれらが“水に落ちた犬”になったにしても，かれらはなおも生きており，その精神は死なない。絶え間なくかれらは陰謀をめぐらし，反撃を企らみ，転覆をはかって再び演壇に上ろうとする。われわれプロレタリヤ革命家は魯迅の言葉をしかと記憶にとどめ，水に落ちた犬のもつ根性をたたきつぶさねばならない…。もし権力によってあばかれた資本主義の道をゆくものが，それと認められその地位からおろされたならば，それでかれらは死んだ虎だと考える人もいる。これは間違いである。かれらは紙の虎であるが死んではいない。われわれはまだ徹底的にかれらを批判していない。かれらはまだ臭味を放たず生きている虎である…」[9]。

魯迅は反動との関係を断つことを訴えたが，毛主義者は中国の共産主義者への懲罰を訴えた。立場の相違は原則的で共通のものはない。魯迅の名前と“水に落ちた犬を打て”という言葉だけがとられた。このようにして魯迅の名により中国人民の優秀な代表者たちを容赦なく攻撃することが神聖化された。北京の中央紙にはこの公式に認められた評論からとり出した言葉や表現が相継いで現われるようになった。“プロレタリヤ革命家”の名のもとに毛主義者は黒い破壊工作を行った。“文化革命”の本質は魯迅の革命的意

図とは全く反対であったから，ひとつの意味がひきだされた，それは魯迅じしんが念頭においた敵をたたきつぶすということが無視されてしまったことである。

評論「フェア・プレイはまだ早い」は試めされたものとしてただひとつのものである。魯迅の他の作品では意味の書きかえや宛先の書き変えはなかった。したがって“文化革命”の何年間に重版されることはなかったのである。

“文化革命”の時期に魯迅の名とかわった風波はこれにとどまらない。1967年中国共産党内の“打倒”された反毛派への制裁を隠蔽するほかに，1968年には非常に巧妙な阿諛の讃美歌で江青をたたえるためにかの女がかれと同等にみられた。歴史的事実を無視して計紅緒とかいう人はこう書いている。「30年代の文芸戦線で毛主席のプロレタリヤ革命路線の主な先導者は魯迅だったが，60年代に文学・芸術の分野，文化の戦線で毛主席のプロレタリヤ革命路線を導く最も勇敢で最も断乎としたそして最も終始一貫したプロレタリヤの革命家はわが熱烈に愛される江青である」[6]。

この筆者は魯迅が“毛主席の革命路線”を実行したという証拠で自己を煩わすことはしない。なぜならそういう証拠はないからである。そういう事実はない。このためにかれは自分の大文章のなかに魯迅の文章から集めたひとつひとつの言葉もひとつの意見も引用できなかった。こうして証拠なしに虚偽をもって魯迅をば“文化革命”の予言者なりと一気に宣言する。筆者は「毛沢東思想の陽光が魯迅を照らすことに反対した」のは中国共産党内の反毛沢東派であるということでかれらに喰ってかかった。根も葉もない言葉も最小の試みも魯迅がこの“思想”に近いことを示さない。それは驚くべきことではない，というのはそうした近しさは存在しなかったから。かようなことでは別な発言があった。江青にかんしては「魯迅とおなじく迫害者，圧迫者，弾圧者，誹謗者については毅然として果敢に反撃を加えた」と周恩来首相もその頃語っている[1，20]。

論文は多いのに計紅緒のありふれた論文が注意をひこうとしていること

は単に江青を魯迅に凝えることばかりではなく，江青の創作の功績をさらに加えようという意図である。現代中国の大作家たる魯迅とくらべようとするからには何か独自な作品がなければならない。したがって計紅緒はいう，「江青は魯迅とおなじく桎梏を解き放ち，非難中傷の猛攻を絶滅し，絶えず陰謀を失敗させ，文学芸術における毛主席の革命路線をまもった。江青は自ら京劇の革命を指導し，輝かしい模範的な革命劇を創造し，プロレタリヤ文化大革命への道を掃き清めた」［6］。

“模範劇”は現在では毛主義者によりまず集体創作とされる。しかし1968年にはそれらを江青ひとりの手に帰せんとする試みがなされ，かくてかの女が魯迅になぞらえられそうになった。どうしてこういうたわけた目論見がいきなり罷り出てきたのか今なお分明でない。しかしそれは出て来た。なぜなら北京の新聞は江青を大作家になぞらえることを拒否したからである。中共九全大会での林彪報告では江青の名は全然出てこないで“模範劇”も含めてその功績はすべて毛沢東のものとされている［10］。

1971年9月25日に魯迅生誕90周年記念が行われた。記念日の準備は早くからなされ，周建人の「魯迅に学び，修正主義批判を深めよ」という論文が発表された［12］。

魯迅の実弟のひとり周建人は現在は80才以上で，中国人民代表会議の常任委員会の副議長，浙江省革命委員会の副議長の名誉ある地位にある。公けにされる魯迅論の大部分はかれが署名する。それは明かであり偶然ではない。つまり周建人の名前は公式の観点を述べた論文に権威をあたえるためにある。

周家には色々な人がいて，全く反対な考えの人もいることを思いおこすことは適宜であろう。魯迅のもうひとりの弟周作人は抗日戦争の時期に，祖国の反逆者となり，カイライ政府文部省の役職についた。そして魯迅の弟のひとりが毛主義者の革命委員会に入っており，そして毛沢東政治路線に奉仕のためおのが文筆をかれらに任せている事実は，まだ毛主義の思想に魯迅が関係していた証拠にはならない。

周建人の論文では魯迅に敵がいたこと，つまり「あらゆる毛色のブルジョア学者，修正主義者，それにニセマルクス主義者」[12，26] の敵がいたといっている。これらの敵は論文の筆者がいうように，毛主義者の観点からすれば，“個性の解放”，“ヒューマニズム”と“戦いでの個人的探索”を志向するといった否定的特徴を魯迅に付加することで魯迅を“中傷”したことになる。魯迅の個性の解放にたいする志向は1941年8月12-13日付の中国共産党の延安の新聞『解放日報』で周揚が指摘したと筆者はいう。日付は非常に重要である。周揚はその論文を毛沢東の延安における文芸座談会での演説より前に印刷に付した。周揚を“ブルジョア思想”と非難しながら論文の筆者はあたかも魯迅が晩年になるにしたがい「ますます毛主席の革命路線に忠実になった…[12-27]。そして毛主席を熱愛した」[12-28]。という見解を対置する。つまりかれは1966年に許広平が発表した意見をくりかえしたのである。

具体的な例にもどろう。中国の解放区にたいする魯迅の共感には疑問の余地がない。しかし現今の筆者は魯迅が「毛主席の指導する紅色革命根拠地を讃美した」ということによりそれに偏見をおしつけた（傍点はア・ヂェラホヴツェフ）。すなわち，中国共産党中央委員会にあてた魯迅の祝電をくわしく引いているが，それには「あなたがたに中国と人類の期待がかけられている」という言葉がある。論文の筆者は公然と宛名をかえて自己流に解説する「これは魯迅の毛主席にたいする限りない熱烈な愛を完全に伝えている」[12-28]。電報の原文には毛沢東の名前はなく，中国共産党中央委員会にそれはあてられているにもかかわらず。

この論文には引用の必要のため適当なものを魯迅からたくさんひき抜き，それらを新らしく意味づけるといった傾向が顕著である。たとえば，中国の革命闘争の困難さと犠牲について語って魯迅はこう書いた。「革命家にとって，よく始めることはむずかしくない，よりむずかしいのはその後ねばり強さを失わずよく終ることである」。中国革命家が無数の犠牲をはらった苦しいたたかいを反映したこの言葉はいまだに老練な革命家や国内戦争で

党と人民に功績あった人々，そして現在ではかれによると，「発展をやめた」つまりもっとはっきり言えば，現在の政治路線を支持しない人々にたいする圧迫を正当化するために意味をかえられている。

今日の要求を満足させるために魯迅の創作の道，長い思想的探求が歪められる。「個人への探索などない！」と論文の筆者は叫ぶ。かれにとって個人の探索はすべてブルジョア個人主義なのだ。明らかにこういう論議は現在中国で行われている再教育運動のために重要である。しかし“個人の探索”は今日の政治路線の実際の本質を洞察したうえそれをしかと認識させるだろう。ところで魯迅の生涯は長かった。かれは絶え間なくマルクス主義に近づきマルクス・レーニン主義の創始者の著作とソビエトの文学批評を急速にではなかったが知るようになった。魯迅の思想の変化，それは否定できないが，それを論文の筆者はどのように解釈しようとしたか。政治的なモチーフにしたがって“個人の探索”を拒んでかれは説明する。魯迅の“根本的な変化”こういう“大飛躍”がかれの意識で突然行われたのは1927年4月14日（原文のまま，実際は12日—川上）に蔣介石の影響の下においてである。正にこの日に蔣介石は反革命の裏切りを行い，中国の共産主義者にたいして血のテロ行為をはじめた。こうして魯迅は裏切りの衝激をうけて変化し，ヒューマニズムを放棄することになったようである。この“根本的な変化”は魯迅を「あらゆる“スキー”（斯基）とは異った偉大なプロレタリヤ文学者」にしたのである［12-28］（28は誤り，実際は30—川上）。

論文の筆者が蔣介石の反革命の裏切りが魯迅の世界観に非常に重要な影響をあたえたと付け加えたことはかれを困らせない。さらにかれはここでその名前が“スキイ”で終る外国の文学者にたいし魯迅を民族主義的に対立させそれを推し進めることをかくさない。陰険で真実ばなれした表現…魯迅は民族主義の精神が全くなかった。かれは尊敬をこめてソビエト文学につき多くを書いた。かれの発言は広く知られている。『中露の文学の交わりを歓迎して』［2 (2)，98-102］において魯迅はロシヤ文学者ドストエフスキイ，ソビエトの作家リベジンスキイ，この人の小説『一週間』は中国語に翻訳さ

れた。こういう文学者たちを立派に批評した（もし簡単にいえば，これらの文学者をあげただけでも，その名前は“スキイ”で終っている）。しかし魯迅じしんにとってこういう事情は象徴的でもなければ確定的なものでもなかった。魯迅はルナチャルスキイの多くの論文のほかにゴーリキイ，チエホフのものを翻訳し，毛主義者の憎むところの書物，ショーロホフの『静かなドン』の翻訳を校閲した。かれは『静かなドン』の中国語版にあとがきを書いて，ショーロホフの敍事詩は「わが祖国，偉大な古い国の人々の生き生きとした魂を示してくれる新らしい作家の出現を助ける」と期待をかけたのである。ショーロホフにたいする毛主義の悪意ある中傷と著名なソビエト作家の敍事詩篇にたいする魯迅の讃美，ここにはアンタゴニズムが明らかに表われているではないか。この論文では“毛沢東思想”の反ヒューマニズム精神でヒューマニズムの問題が取り扱われている。論文の筆者にとってはブルジョアヒューマニズムが存在するだけで，プロレタリヤの，社会主義のヒューマニズムは全く存在しない。したがってかれは一般に“ヒューマニズム”の概念に反対し，“ブルジョアヒューマニズム”のレッテルを貼ることでヒューマニズムが共産主義と両立しないとみなす。たとえば，「共産主義と同一のほんもののヒュームニズム」という周揚の言葉が引かれる。周揚はそれについて，実際は，そこで何も語らなかったのだが，“ブルジョアヒューマニズム”を攻撃するためにはそれを出すだけで充分である。最後の頁は“ブルジョアヒューマニズム”，“全人類愛”，“抽象的な人道主義”と非難され，また“人生の楽しみ”を伝道したいという“現代修正主義”の攻撃にあてられている。この批評は“文化革命”の最中とその後に強力に宣伝され，毛主義者による誇張された禁欲主義と内面では全く結びついている。

1971年9月英語の中国雑誌に周建人の新らしい論文『中国文化革命のパイオニヤ』[13]がのせられた。これには前の論文よりも現実の歴史的事実に多く注意がはらわれている。たとえば，魯迅の思想的発展は漸進的なものと認めている。蔣介石とその反革命の裏切りは「魯迅に一所懸命マルクス主義を研究させる刺激となった」だけであって，かれ自身の意識を変えな

かった。外国人のために予定したこの論文では強いられた結論が緩和され，“毛主席”への愛の確信は取り下げられている。筆者はこのたびは魯迅がマルクス主義者だったということを確言しているにとどまる。かれの後期の活動ではそれを否定できない。だがこの論文のつぎの結論は信じられない。「毛主席がおこし指導した先例のないプロレタリヤ文化大革命のみが階級の敵によってその姿を歪められていた魯迅を共産主義者としての真の高みにひき上げたのである」[13-67]。

“文化革命”は実際上自国の大作家を読む可能性を中国人民から奪ってしまったことを思い出そう。正にそのため外国人が読むためにこの雑誌には英訳された魯迅の作品が5篇のっている。これは誰も自国語で魯迅を読めないという状況で魯迅生誕90年を祝うという不体裁な事実を隠蔽するためのものだった。

1971年9月25日『光明日報』にのった中国の読者のための論文は隠しだてがなくて乱暴なものである。ここではまたも魯迅を歪曲しようとする試みがなされ，かれを毛沢東の追随者となし，他の活動家にたいし敵意をいだいた人になっている。魯迅と中国共産党中央委員で一時は中央委員会総書記だった瞿秋白との親密な友情と協力関係は広く知られている。この友情は文学・批評活動での相互援助，書物の出版とマルクス・レーニン主義文学論の宣伝にかんして協力したことによって証明されている。論文の筆者は魯迅と瞿秋白の間の原則的矛盾という印象をつくり出そうとする，「或る時瞿秋白が魯迅に短い手紙を送ったがそれには“犬が耕す”と署名してあった。どうしてこんな署名をしたのか――と魯迅が尋ねた。政治には無能で犬が畑を耕すようなものだから――一方がこたえた。魯迅はかれの自嘲にきわめて不満だった。後にかれが『海上述林』を編纂したとき，この本に瞿秋白の翻訳を入れたが，かれの論文は入れなかった。ということはマルクス主義者魯迅が留保条件をもって瞿秋白に対していたことの証拠である」筆者は以上のように結論する。

論証されぬものを証拠だてるために優に30年以上は古い言葉が記憶を

たよりに引用され，現代中国ではめったに見られない本からの引用がありさえする。しかし中国の古書の体裁をしたこった名前のこの珍らしい出版物を調べてみると，そこにはマルクス，エンゲルス，レーニンの翻訳，これらの人の文学についての発言，それに当時のソビエトの批評家の論文が見える。まえがきを除いてそこには中国人の書いたものはない。そのことによってむろん瞿秋白じしんの書いたものの欠落が説明されている。こうしてこの事実は証拠なしの臆測による原則的な分岐にかんしては何も証明しない。魯迅をその環境，友人，弟子から引きはなして，かれをチッポケで疑い深く交際嫌いとすることで，現代の批評家は事実上魯迅の人間像を歪曲している。

瞿秋白が国民党によって銃殺されてから魯迅はその翻訳を集め校訂して検閲の圧迫の下にありながら死んだ友を記念して本にして出したことを思いおこす必要がある。上巻は文学と芸術の理論，下巻はゴーリキイ，ベドヌイ，ルナチャルスキイその他ソビエト作家の翻訳をふくむ。初版の表紙に魯迅は瞿秋白のペンネームのひとつ（史鉄児またはストラホフ）のイニシャルSTRの3文字を示した。暗号は国民党の反共テロのもとでは欠くべからざるものであった。本は検閲を迷わすために豪華版とし，そしてそれが図にあたった。しかしそれをつくるにはどんな危険をおかさねばならなかっただろう！　この出版は魯迅の功績であり，かれの純粋な友情と勇気，革命の事業に自己をなげだした奉仕の心，中国にマルクス主義思想を広め，民族主義の反動体制のもとでソビエト文学を宣伝したことを明らかに証拠だてる。この出版物を魯迅と瞿秋白との分岐と詐り一方の犠牲で他方を中傷しようとする現代中国の公式的批評はなんとつまらなくて不当に見えることか。そういう分岐の証拠はない。周建人が引いた“犬が耕す”のペンネームについてもそういう話があったならば，瞿秋白の謙譲さのみを証明し，魯迅がかれの活躍をいかに高く評価していたかということであって，思想性の“分岐”は全くない。

魯迅の記念行事は終った。しかし中国の新聞はステレオタイプの「魯迅に学ぶ…」の形で始る評論を発表しつづけた。しかしかれらは魯迅に，その

作品に，そして記念行事にたいしてはすでに従的な態度をとっていた。かれらの注意は1971年9月に始り特殊な勢力で現れた中間指導部内の政治危機に向けられていた。1973年4月にはじめて中国の新聞に魯迅全集の再版が予告された。

魯迅はソビエトの読者によく知られている。丁度記念行事の年に（1971年）ソ連では世界文学叢書のうちに魯迅の小説を全部収めたロシア語訳（30万部）が出た。この叢書で魯迅の名は充分な根拠をもってゴーリキイ，ローラン，ヘミングウェイ，ショーロホフの名と並んでいる。中国の大作家の作品の出版は中国の文化遺産にたいするソビエト人民の尊敬と興味をあらわすもうひとつの証拠である。

ソ連作家同盟では魯迅記念の集会をひらいたが，それに参加した組織はソ中友好協会，極東研究所，ソ連科学アカデミー東洋学研究所である。この集会に出席したソビエトの中国学者はヴェ・エス・コロコロフ，ヴェ・ヴェ・ペトロフ，ヴェ・エヌ・ロゴフ，ヴェ・エフ・ソローキン，エヌ・テ・フェドレンコ，エリ・ゼ・エイドリン，これは魯迅の作品研究でそれぞれの功績をあげ，作品をロシヤ語に翻訳し，中国作家の作品をわが国に広めた人々である。

魯迅の記念行事はレニングラードの特別な集会でも行われ，多数の論文が新聞や雑誌にのり，ラジオで放送された。魯迅の祝賀はソ連では広い社会性をとった。

魯迅の権威は中国人民の文化自体が生きているように，かれの祖国中国に生きている，“文化革命”もそれを絶滅できない。かれの作品は疑いもなく中国の読者にもどるし，中国人民は改めて魯迅の真実の声を聞くだろう。「もし読者の心を動かしたなら！　その時われわれは奴隷ではないだろう」1935年11月14日に魯迅はこう書いた。かれの書物は中国の思索するあらゆる人々を動かしたし，将来の中国の読者を動かすだろう。

引　用　文　献

ロシヤ語のもの

［1］『ザルベジョーム』1968年6月12-20，第25号（418）.

［2］魯迅選集，第2巻，モスクワ，1955年.

［3］毛沢東選集，第2巻，北京，1959年.

［4］セマノーフ，ヴェ・イ，魯迅と独断家，『アジヤ と アフリカの人民』，1968年，第2号.

中国語のもの

［5］『中国の社会主義文化大革命』，第1冊，北京，1966年.

［6］『光明日報』，1968年4月1日.

［7］『人民日報』，1966年9月20日.

［8］『人民日報』，1966年11月1日.

［9］『人民日報』，1967年7月17日.

［10］『人民日報』，1969年4月28日.

［11］魯迅全集，北京，1957-1958.

［12］周建人『魯迅に学び修正主義への批判を深めよう』，『紅旗』，1971年，第3期.

英語のもの

［13］Chou Chien-jen, Lu Hsun—Pioneer of China's Cultural Revolution, —«Chinese Literature», 1971, No. 10.

訳者あとがき

この論文は「中国の“文化革命”発動後（或いは文化革命中）における魯迅作品の運命」とでも題したらよいような内容であり，それほど文化大革命中における魯迅の運命が語られている。かように積極的な反毛沢東思想で貫かれた魯迅論は中国では絶対に現れるはずがない。そういう論文を訳出したとなるとその訳者は反毛沢東の親ソ派に属するかと早合点する人もあるかもしれない，がそれは大間違いである。私は親ソ派でもなければ親中国派でもない，強いて分類すれば是是非非派に属する。したがって本論文をあまりお目にかかれない資料のひとつとして訳出した。本来ならばこの論文を批

判すべき予定であった。ところが資料不足でそれもかなわぬ，そういうことで論文ならぬ翻訳をのせることになったわけである。批判らしい批判はできないが，それでも一二気づいたことをのべる。第一は文学者或いは文学研究家としての政治権力にたいする基本姿勢の問題である。魯迅が「而已集」の「革命文学」でいった言葉を引いて論文の筆者は許広平を革命文学者の第一の型ときめつけるが，まあそれもよい。それならば筆者自身はどうなのか。そういう反問は中国から出るにちがいない，筆者自身も許広平たち同様権力の庇護のもとに物を書いているのではないのか。事実は明瞭である。ソ連でも中国でも反体制的なことは滅多なことで書けないのである。ソ連にあって反毛沢東を唱えるのはいと容易い体制的なことであろう。私にはそう思われる。第二に，文化大革命が始まってから魯迅の書いたものは事実上禁止の状態にあるということについて。文化大革命は或る意味では混乱であった。したがって魯迅の作品が書店や図書館で見られなくなるといった状態にたちいたったのは事実かもしれない。しかしその理由のひとつには注釈付魯迅全集が周揚や馮雪峰の手で出版になったこともある。その点もみずしきりに文化大革命にだけ結びつけて論じているのは政治的意図が露骨すぎるし一面的ではなかろうか。また筆者が1973年4月に魯迅全集の出版が予告されたといった全集はすでに出版となっているが，これはみな意味の書きかえが終ったから出版されたのかという疑問も残る。

最後に筆者について一言するとこの人は話本研究家であり，現代文学の専門家ではなさそうである。この論文は次の書物所収のもの。「ソ連における中国文学研究」，フェドレンコ六十才記念論文集，ソ連科学アカデミー東洋学研究所，モスクワ，1973年。